享保期朝鮮薬材調査における「楸」の基原

（帝京大・薬）〇木下武司

【目的】演者は生薬アカメガシワの薬史学的起源を解明する過程で、梓・楸の基原が日本と中国で大きく異なり、その誤用としてアカメガシワ樹皮の薬用が発生したと推定した[1)]。梓・楸のいずれも中国原産のノウゼンカズラ科キササゲ属種であって、日本に野生がないため誤用が起きたのであるが、同じく梓・楸が野生せず、古くから日本以上に忠実に中国医学を受容した朝鮮ではどう処理されてきたのだろうか。中国・日本と比べて朝鮮は本草学・医学分野の古典資料が格段に少なく、文献学的に検討する余地は限られているのであるが、江戸中期の享保期に八代将軍徳川吉宗の意を受けて、対馬藩が中心となって朝鮮薬材調査が挙行されている。この結果、オタネニンジンが導入され、日本で大規模な商業生産に至ったことは遍く知られている[2)]が、約 180 種の薬材調査項目の中に楸が含まれており、同行絵師による写生図と江戸中期を代表する本草家丹羽正伯による鑑定報告書（東医宝鑑湯液篇和名）や調査の内容を記述した文書（宗家文書「薬材質正紀事」など）が残されている。これについては慶應大学文学部田代和生博士による詳細な研究[3)]があるが、各品目について生薬学および本草学的観点からの検討はほとんどなされていない。本研究ではこれらの資料の解析から朝鮮で認識されている楸の基原を明らかにする。

【結果・考察】朝鮮における楸の基原に関してもっとも有益な情報源となったのは、最前線で朝鮮薬材調査を行った対馬藩士越常右衛門の報告であり、それによると楸の現地名（郷名）は「カライナモ」、漢名の別名が山核桃であると報告している。東医宝鑑湯液篇「楸木皮」に諺文で同じ郷名が記されており、この名は現在でも通用し、クルミ科マンシュウグルミを指す。山核桃は中国でマンシュウグルミのことであるから、朝鮮ではマンシュウグルミを楸としていたことがわかる。郷薬集成方本草之部に「胡桃郷名唐楸子」とあり[4)]、外来産のクルミを唐楸と呼んでいたことから、朝鮮産の近縁種マンシュウグルミを単に楸と称していたことを示唆し、朝鮮では郷薬集成方の成立した十五世紀初めころからこの名があったことになる。一方、楸の絵図については、鋸歯はないものの葉は奇数羽状複葉の形を為しクルミ科といってよいが、毬形の果序らしきものから、マンシュウグルミではなくノグルミと推定した。マンシュウグルミは朝鮮半島南部にはないから、ノグルミを誤認あるいは代用としていたと思われる。丹羽正伯はこれを葉・樹皮の状態が似るモクセイ科シオジと鑑定している。

【文献】**1)** 日本生薬学会第 54 回年会（名古屋、2007 年）要旨集。 **2)**日本薬学会第 129 回年会（京都、2009 年）要旨集。 **3)** 田代和生、「江戸時代朝鮮薬材調査の研究」（慶應義塾大学出版会、1999 年）。**4)** 小倉進平、青丘学叢第十四号、一九三七年。